

夏



春



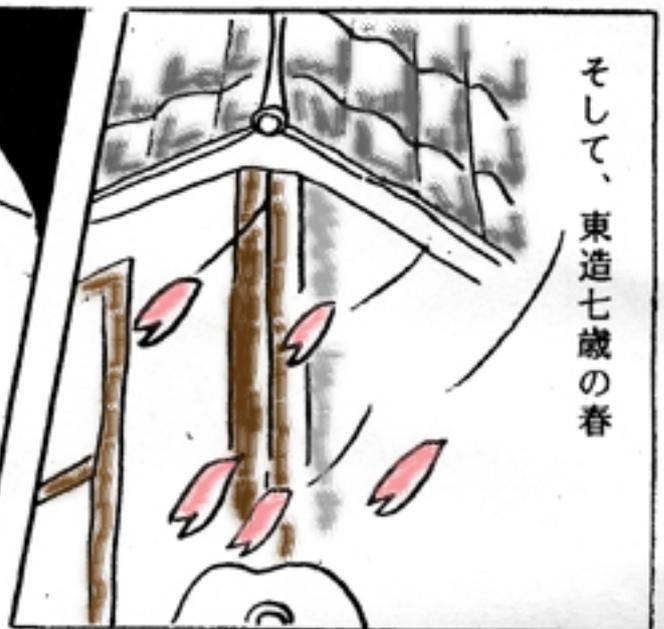
冬



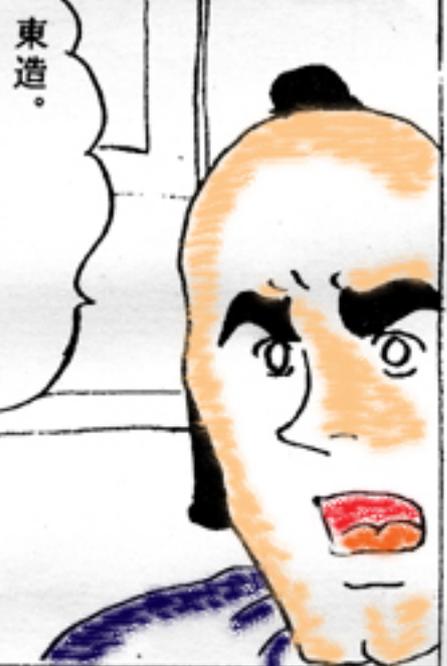
秋



そして、東造七歳の春



東造。  
おまえも七歳になった  
のだから、将来の事  
について話しておきたい。



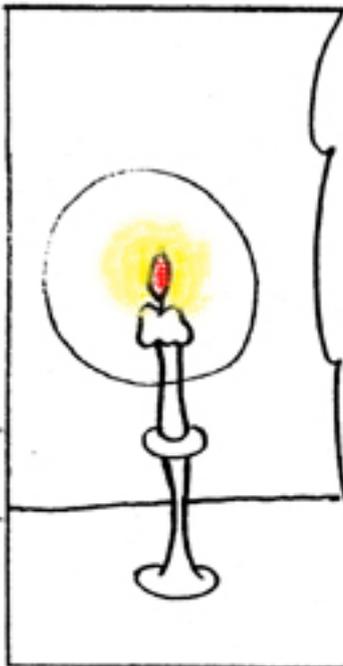
おまえも  
知っているようにこの遠藤家はけっし  
て身分の高い家ではない。おまえがい  
くら頑張っても軽輩の子は一生軽輩の  
子で終る。そういう世の中なんだよ。



いつまでも武士の世が  
開国  
はんだい  
続くとはいえぬ。



おまえがもし、世に名をなそうと思  
うなら武士ではだめだ。  
おまえは書が好きなのうだな。  
その書で名を立てるがよい。  
書家になれ。









失敗も多かったが  
生来の我慢強さで  
書の腕はメキメキ  
と上達していった。



筆の持ち方は  
こうするのだ。



お前はすいぶん  
上達した。もう  
わしが教える事  
はない。



やがて



万延元年（一八六〇）暮  
鳥取藩校

尚徳館

東造八歳



そうだ。  
伯父上に  
たのんでみよう。



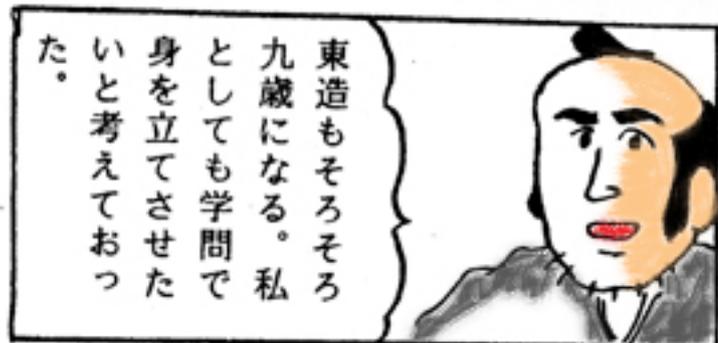
私は尚徳館で勉強を  
したい。でも、父は  
許してくれるだろうか。



私もお前を尚徳館に入れて  
やりたいと考えておった。  
私からも父上に話してあげよう。



じつは……



東造もそろそろ  
九歳になる。私  
としても学問で  
身を立てさせた  
いと考えておっ  
た。



東造はなかなか  
見どころのある  
子じゃ。この際  
尚徳館に入れては  
どうだろう。



書家になるか  
どうかは、そ  
のあとで決め  
ればよいと思  
う。